

第8分科会

幼児期の終わりまでに

育ってほしい姿を踏まえた

保育実践

問題提起園 いずみ幼稚園

問題提起者 門倉 まなみ

1 研究課題

子ども理解

2 研究・研修の視点

近年、少子化・核家族化・共働きの増加などにより子どもたちを取り巻く状況が変化し、保護者とのコミュニケーション不足、愛着形成がうまくいかないなど、様々な問題を抱え入園してくる子どもも少なくない。家庭という狭い世界から、集団の場へ入り、園生活を通して色々な初めての体験をすることになる子どもたち。一人一人の子どもたちが安心して過ごせる居場所作りを心がけ、未満児クラスからの丁寧な関わりによって、楽しめる遊びが増え、子どもたちは少しずつ自分の世界を拓けていく。

本園は幼稚園から幼保連携型認定こども園に移行し、乳児保育からの育ちを、幼児教育へとつなげ、その成長過程を見守る中で見えてくるものが沢山あった。

そこで、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に着目しながら、子どもたち一人一人の発達段階を考慮し、乳児期から幼児期の成長を見守る中で、子どもたちが見せる様々な姿から、どのような援助・関わりが必要であるかを考えてみた。

3 主な研究・研修の内容と計画

(1) 主な研究・研修の内容

- ・ 遊びや生活を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、具体的にどのような場面で見られているのかを話し合う。
- ・ 山あそびや食育活動などの具体的な実践事例をあげ、その活動を通して見えてくる子どもたちの姿から、保育者としてどのような援助や環境設定が大切であるかを考える。

(2) 研究計画

●令和元年度

- ・ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、子どもたちの主体的な姿を引き出す為には、どのような経験が必要かを協議しあう。
- ・ 山遊びや食育活動にポイントを絞って、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連性を考えてみる。

●令和2年度

- ・ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、実践の中で生かしていく。
- ・ 小学校との円滑な接続の為の、連携の図り方を考える。

4 研究の概要

(1) 研修・研修テーマのとらえ方

幼稚園生活の中での全体活動によって育まれる幼稚園教育において育みたい資質・能力の3つの柱を土台に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた保育実践とはどのようなものなのかを手がかりにした。

本園で行っている「山でのあそび」「食育活動」などを通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が、どのように生かされているかということを保育者間で話し合いながら、園児一人一人の発達や学びの連続性に注目し、実践を行った。

(2) 研究の内容

園での生活や遊びを通して、子どもたちがどのような力を身につけているのか、各年齢の取り組み等をあげながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連性、どのような場面においてその姿が出現しているのか。また、これまでの活動の中での異年齢間交流を通して、子どもたちの遊びがどのように変化していくのか、展開されていくのかを考えてみた。

(3) 実践例

ア 山でのあそび

園児達は、年間を通して園舎裏にある山から様々なことを学び、遊びを発展させている姿が見られている。荒れた山林であった裏山を、子どもたちが入ることができるように、数年前から園長先生が伐採作業を行い、見通しの良い切り開かれた土地となり、子どもたちにとって秘密基地のような楽しい場所となっている。

初めて歩く山道に、不安な表情を浮かべている年少児。様々な遊びを経験する中で、体力もつき、年中児になると、大人の手助けがなくても、しっかりと地に足をつけ山道を降りている。



丸太渡りを楽しむ
年長児♪

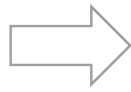
年長・年中児の子どもたちが丸太渡りなどをしている様子を見て、「自分たちもやりたい」という憧れの気持ちが芽生えた年少の子どもたち。初めは「こわい」「できないよ～」と泣き出す子どもも数名いたが、年長児や年中児が「後ろ向きに降りたら転ばないよ」「足の指に力を入れて、ゆっくり降りるんだよ」と教えてくれ、真似る様子が見られた。丸太の上や、不安定な土壌の上を歩く中で、バランス感覚が大切なことや、踏ん張ることが大事であると気付いたようだった。



丸太渡り競争☆

山でのあそびの経験を通して、木の枝、葉っぱ、花など、身近な素材を使い、自分で考え、あそびを展開することもできるようになってきた子どもたち。倒れていた丸太の上に、丸太を置いておくと・・・子どもたちがそれを発見!!!子どもたちが、どのようにして、遊ぶかを見守っていると・・・

倒れていた二つの丸太がシーソーとなり、そこにまたがり楽しそうに遊ぶ姿があった。



丸太シーソー♪

<<考察とまとめ>> ～幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とのつながり～

自然豊かなこの環境の中で、思いきりのびのびと全身を動かして楽しく遊び①、多様な動きを獲得し、バランス感覚を培ったり、友だちとイメージを共有しながら、複雑な動き②の遊びを楽しんだりするようになってきている子どもたち。思考力が高まることで、善悪の判断や、危険を予測する力も身につく、集団で活動することで、社会性や協調性も身につく③様子が見られている。綺麗に舗装された道路と違い、不安定な土壌、傾斜のある道を降りることが怖くて、「怖い」「自分にはできない」とあきらめていた子どもたちも、年長・年中児の遊んでいる姿に、刺激を受けてきた。「お兄ちゃん・お姉ちゃん達すごいな～」「かっこいい」「自分もやってみたい」という憧れの気持ちから、動きを真似したり、少し怖いけれどやってみる④といった行動をとるようになってくる。また、やりたい遊びがあることで、順番を待つことや譲り合うことができるようになり⑤、年長児が自分より小さいお友だちに、優しく接し、手助けする⑥といったほほえましい姿も多く見られている。山での様々な体験を通して好奇心や探求心も高まり⑦、その遊びを仲間と一緒に経験⑧する中で仲間と共有する楽しさや、思いやり助け合いの気持ち⑨も芽生えている。10の姿は、達成目標ではなく、育ちの方向性であることを保育者が常に念頭に置きながら、今後も子どもたちの気づきを大切に、皆で話し合い、協力・工夫⑩しながら色々なことに取り組んでいこうと思う。自分自身が困難にぶつかった時、困難を乗り越える術を身につけていけるように、たくましく成長してほしいと願っている。子どもたちが「今」、興味・関心を持っていることに気づき、それを遊びの中に取り入れ、子どもたちに必要な体験が得られるように、保育者も共に楽しみながら子どもたちと楽しく過ごしていきたい。一人一人の自己肯定感を高め、異年齢間の交流も深めながら、互いを認め合う集団づくり⑪ができるように、努力していこうと思う。今、いずみ幼稚園の周りにある自然環境を大切にしながら、子どもたちの楽しい遊び場となるように今後も少しずつ環境を整えていきたい。

- | | |
|---|---|
| ① | 【健康な心と体】 |
| ② | 【健康な心と体】【協同性】【豊かな感性と表現】 |
| ③ | 【道徳性・規範意識の芽生え】【社会生活との関わり】【思考力の芽生え】【協同性】 |
| ④ | 【思考力の芽生え】【自立心】 |
| ⑤ | 【道徳性・規範意識の芽生え】 |
| ⑥ | 【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【社会生活との関わり】 |
| ⑦ | 【思考力の芽生え】【豊かな感性と表現】 |
| ⑧ | 【協同性】 |
| ⑨ | 【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【社会生活との関わり】 |
| ⑩ | 【言葉による伝え合い】【思考力の芽生え】【協同性】【自立心】 |
| ⑪ | 【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【言葉による伝え合い】【思考力の芽生え】 |

イ 食育活動

子どもたちの姿の中で「食」に対する課題が多く見られていたこともあり、「食を楽しむことのできる子

どもたち」との願いをもって、行ってきた食育活動の中で子どもたちの育ちを追った。

◎1・2歳児の取り組み

「おおきなかぶ」の身体あそびを楽しみ、「かぶさんとんだ」の絵本を繰り返し楽しんでいた1・2歳児。子どもたちの興味・関心のある事柄を日々の保育の中に取り入れることはできないかと考え、食育活動も兼ねて小さなかぶ「ラディッシュ」を育てることにした。



<<考察とまとめ>> ～幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とのつながり～

子どもたちが楽しんでいた身体遊び①の歌をヒントに、子どもたちが楽しんで取り組める食育活動は何かと考え、ラディッシュを育てることになった。自分達でプランターを作り、看板②を立て、ラディッシュの生長を楽しみながら、見守りを続け③、収穫を心待ちにする子どもたちの姿があった。

自分達で成長を見守り続けた野菜を収穫することで、種撒きから収穫までの一連の流れをやりきった達成感を感じられたようだった。収穫の際は歓声を上げ喜びの表情を浮かべていた。野菜を全く食べなかった子が、自ら手を伸ばして食す姿や、「おいしいね」と笑顔を浮かべる④子も多かった。

友だちと一緒に楽しいと感じ、関わりを深めていく中⑤で、共通の目的を持ちその目的を達成し喜びを感じる体験を重ねていくことが、子どもたちの自信、学びへ向かう力へとつながっていくのではないかと感じる。子ども自身が、「楽しい」と思える遊びの中で体験したことが、沢山の学びへとつながっていくことを考え、今後も子どもたちが楽しんで取り組むことのできる活動作りを行っていきたい。

- | | |
|---|--|
| ① | 【健康な心と体】【協同性】【豊かな感性と表現】 |
| ② | 【数量や図形・標識や文字等への関心・感覚】【言葉による伝え合い】【豊かな感性と表現】 |
| ③ | 【自然との関わり・生命尊重】【自立心】【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】
【数量や図形・標識や文字等への関心・感覚】【言葉による伝え合い】【豊かな感性と表現】 |
| ④ | 【自然との関わり・生命尊重】【健康な心と体】【言葉による伝え合い】【豊かな感性と表現】 |
| ⑤ | 【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【豊かな感性と表現】 |

◎年少児の取り組み

保育室の絵本棚の中にあつた、かこさとし作の絵本「にんじんばたけのパピプペポ」。朝の会や帰りの会のお集まりの時間など、読み聞かせの時間にその絵本を見たり、文字の読める友だちが読んでくれたりしたことで、「にんじん」という食物に関心を示す子どもが増えた。「人参を育てて何か作りたいね～！」との子どもの声から、みんなで人参を育てることになった。



☆栽培から収穫までの一連の流れを通して、子どもたち自身が人参の育ちを理解することができた☆

<<考察とまとめ>> ～幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とのつながり～

人参栽培を通しての様々な活動①の中では、友だちと一緒に食べる楽しさ②、食べ物への関心、栽培活動を通して食に関する学び③にも興味を持つことができたのではないかと考える。

保育者や友だちと心地良さを感じながら、「友だちっていいな」「一緒って楽しいな」④と思えるように、子どもの夢中に寄り添うこと、「あった」「みてみて」などの出会い⑤を支える邪魔をしないこととしていると、様々な身近な自然物との出会いが生まれる。生育過程の見守りを続ける中で、水やりや草とりなどの世話が必要であることを知った⑥。日々の小さな変化に驚きと喜びの感情⑦が芽生え、収穫を心待ちにしているようだった。収穫時は、自分達で収穫した人参を皆で並べて数えたり、重さや大きさを比べあったり⑧等、子どもたちが楽しく色々なことを学び成長していく姿があった。

収穫した人参を使い人参ケーキを作る為に、皆で買い物に出かけ、材料を探したり⑨、出来上がった人参ケーキを他のクラスのお友だちに振舞ったり⑩した経験も、子どもたちの心に深く刻まれたことと思う。

- | | |
|---|---|
| ① | 【自然との関わり・生命尊重】【健康な心と体】【協同性】【思考力の芽生え】【言葉による伝え合い】
【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】【道徳性・規範意識の芽生え】 |
| ② | 【協同性】 |
| ③ | 【思考力の芽生え】【自然との関わり・生命尊重】【豊かな感性と表現】 |
| ④ | 【協同性】【言葉による伝え合い】 |
| ⑤ | 【思考力の芽生え】【豊かな感性と表現】 |
| ⑥ | 【道徳性・規範意識の芽生え】【言葉による伝え合い】【思考力の芽生え】 |
| ⑦ | 【自然との関わり・生命尊重】【思考力の芽生え】【豊かな感性と表現】 |
| ⑧ | 【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】【思考力の芽生え】 |
| ⑨ | 【社会生活との関わり】【思考力の芽生え】 |
| ⑩ | 【自立心】【協同性】 |

(4) まとめ

今回、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた保育実践」というテーマで研究を進めてきた。年間を通しての活動の中で子どもたちの姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と照らし合わせてみることで、遊びを通しての総合的な指導を通して育っていくその姿が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」につながっていくのだと感じる。子どもたちの興味・関心のあふれる事柄に注目しながら、楽しい実践を行っていくことで、子どもたち自身の主体的な姿を引き出すことができるように、その為にはまず、子ども自身が楽しいと感じ、遊びに熱中できる環境作りや、教材研究、子ども一人一人の内面を理解した上での保育者の関わりが、大きなポイントになってくるのではないかと考える。子どもたちの遊びを充実させていくことが、多くの学びへとつながり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と結びついていくのではないかと感じている。子どもたちの日々の姿や、成長の過程から、生活や遊びを充実させることができるように、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5つの領域のねらいや内容、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を、常に念頭におきながら、子どもたちと関わりを深めていくと共に、人格形成の基礎を培うこの大切な乳幼児期に関わる者として、保育者自身の質の向上の為の努力が重要であると考え。保育者同士で、足りないところを補い合いながら、子どもたちと共に成長し向上し続けていけるように、今後も子どもたちと楽しみながら園生活を

充実させていくことができたらと考えている。

乳幼児期の生活の中で、友だちと共同し色々な体験を積み重ねていくことが、子どもたち一人一人の主体性を育てる。子どもたちの感動・好奇心を引き出していけるような関わりや保育ができるように、古典・聖賢に学び、人間性・道徳性をしっかりと育てていきたい。小学校教育との接続に際し、幼児期の生活や遊びの中で身に付けたことを、小学校の教科の学びへとつなげていけるように、小学校との共有の場を増やしたり、子どもたちの育ちの様子などを言語化・可視化して伝える等、園での取り組み、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた子どもたちの育ちを伝えていきたい。また、子どもたちの育ちや学びが、どのようにつながっていくのかをしっかりと考えながら、小学校との連携の取り方等も工夫していくことができたらと思っている。

(5) 今後の課題

今回は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた保育実践」というテーマで、これまでの園での取り組みの中で子どもたちの姿から、どのような育ちが見られていたかということで、研究を進めてきた。「主体的・対話的で深い学び」につながる保育の在り方を考え、子どもたちが困難にぶつかった時にも、自ら解決できるような力や、学びに向かう力をつけていくためには、どのような体験が必要であるのかを考え、これまでの活動などを振り返ってみた。子どもたちの思いに寄り添うことを大事にしながら、日々接しているつもりではあるが、活動が保育者側主導の展開になってしまったり、トラブルを回避する為の、「転ばぬ先の杖」を周到に準備し、保育者が先回りしてしまう現状が多いことが反省である。

また、これまでの保育を振り返ってみると、子どもたちが主体的に活動に取り組むことのできる環境の工夫などをしていただろうか、「こうしましょう」「これはこうですよ」などと指示を出し、子どもの自主性を尊重し、気持ちをくみ取っていただろうかと反省する。これからの取り組みの中で、子どもたち自身が「やってみよう！」と意欲的に向かい、「楽しかった！」という満足感・充実感を味わうことができる活動展開を考えていきたいと思う。

この緑豊かな自然環境を生かし、本園でしか体験することのできない活動を沢山取り入れ、心身ともにたくましく成長してほしいという願いのもとに、子どもたちが主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいける場を作り出し、今後の保育・教育活動を充実させていきたい。子どもたちの発達を見通し、子どもたちの「今」を大事にしながら、保育者自身が子どもたちの小さな変化にも気付ける感性を養い、保育の質の向上と、保育環境の充実に向けての取り組みなどが重要な課題であると考えている。また、幼児教育の中で経験して培った力を、学校教育につなげていく為に、子どもたちの為に園でできることを考えながら、今後も子どもたちが色々な経験をすることができる場作りに努めていきたい。乳幼児期の保育・教育を通して育まれた資質・能力を、小学校において更に伸ばしていくことができるように、小学校との連携を図っていくことが大切であると考えている。小学校との円滑な接続の為に、連携の取り方を考えていくことも、今後の課題である。